

あの日から10年… とっさの判断が命を救う！ 災害から得た教訓を受け継いでいこう

9月29日に平成16年の台風21号襲来から10年の節目を迎えることもあり、被災した住民の方々からの当時、緊迫した状況等の貴重な体験談を紹介し、被災した方々の体験談を語り継いでいくことで、人々の記憶の風化を防ぎ、災害から得た教訓を受け継いでいくことが大切です。

※出典：「平成16年西条市台風災害の記録」「西条市防災100年誌」（いずれも西条市発行）

■大保木地区 神野顕彰さんのお話し

災害は忘れたころにやってくると言います。

私も内心では『石鎚山のおかげで台風が来ても大丈夫なことにはない』と安心していましたが、それを木っ端みじんに打ち砕かれたのが平成16年の台風です。

あの時はちょうど外出中で、とんでもないことが起きていると連絡が入り、初めて状況を知りました。夜には帰る予定でしたが、高速道路が新居浜で通行止めになり、仕方なく岡山からしまなみ海道を通って家に戻ったのは翌日でした。

道路はいたる所で寸断され、崖崩れは数知れず、電話は不通で連絡すら取れません。あまりの惨状に、西条はもう復興できないのではないかと人生が終わったような気さえしました。その日は言葉すら出てこないほどのショックで何も手につきませんでした。



■大郷地区 曾我義一さんのお話し

台風21号のときは近所の民家が床上浸水になり、周囲300メートルほどは大量の水が流れ込んで一面海のような状態でした。桑谷では電柱が2本倒れて流され、もう1本が折れて、桑谷から県道まで全部浸水し、パワーショベルも流されてしまいました。

わずか1時間ほどの間に10カ所くらいで次々と山崩れがあり、流れ出した木が家の玄関に突き刺さったり、橋梁に流木が詰まって、流れがせき止められて床上浸水になりました。水の恐ろしさを初めて知りました。

【この災害経験から学んだこと】

- 地域の人みんなで集まって、どういう手だてが必要か話し合うことが大切。
- 緊急事態が起きた時に無線などの配備している機器をちゃんと使えるようにしておくことが大切。
- 緊急時には慌てずに安全確認や連絡体制の確立を最優先に行いながら支援を待つことが大切。
- 普段から安全なところを確認しておく。
- 隣近所の連絡を取り合うなど、普段から地域のコミュニティを大切にし人間同士の助け合い。
- 災害発生時には、元気な人が何処（どこ）に集まって何をするか、日頃から一人一人が意識を持つ。
- 年に1、2回は避難訓練をして、もしもの時に慌てないようにする。



■問合せ 市庁舎新館5階 危機管理課
防災連携係 TEL0897-52-1267